

菩提達摩の『楞伽經疏』について（下）

伊 吹 敦

（本稿は、本誌前號所收の上篇に續くものである）

三、『楞伽經疏』の内容について

上に『楞伽經疏』の傳承について考察するとともに、今までに見いだした逸文を列擧しておいたから、次に、これに基づきつつ、『楞伽經疏』の内容について考えてみたい。逸文の量が極めて少ないために、それによって明らかにしうることは限られているが、可能な限りの考察を加えておくことは絶対に必要なことであろう。

1. 分量と構成

先述のように、達摩の『楞伽經疏』は、奈良朝において一切經の一部としてしばしば書寫されたわけであるが、當時は紙は貴重品であったし、多數の寫經生や校生によって分擔された仕事を統轄し、また彼らへの給與を算定する必要からも、書寫のための紙は寫經所によって嚴重に管理、記帳されていた。そのため、正倉院文書には、それぞれの經疏の書寫に用いられた紙數が細かく記載されており、それを辿ることによって、各文献の分量をほぼ正確に把握す

ることができるのである。

當面の問題である速摩の『楞伽經疏』に關していえば、「五月一日經」の書寫の際の文書が數多く殘されているので、それに基づいて各卷の紙數を検出してみると、次の《圖表2》のごとくになり「關係文書」は、「大日本古文書」の卷數と頁數で示す）、その總紙數が二二二張（卷第四の「空」一張を含む）^(註)であつたことが確認できる。

《圖表2》

	紙數	關係文書
卷第一	53 張	2-372 8-346 8-388
卷第二	42 張	2-373 8-345 8-387 8-512
卷第三	47 張	2-367 2-385 8-345 8-387 8-418
卷第四	40 張(空 1 張 を含む)	2-437 8-347 8-389 8-553
卷第五	39 張	8-345 8-387 8-406 8-512 8-514
計	221 張	8-525 (未寫の卷第 四を除き181 張とする)

なお、正倉院文書には、その全體を「百八十一張」とするがごとき記載も見られるが、これは明らかに誤りである。こうした誤りが生じたのは、先の《圖表1》に見るように、卷第四のみ、その書寫が遅れたことが原因である。即ち、「常疏充裝演張」に見るように、便宜的に卷第四の紙數(四〇張)を除いて『楞伽經疏』の紙數が記載されたことがあつ

たのを、後にその經緯が忘れられて總紙數に誤られ、遂には目録等にも記載されるに至ったのである。

ところで、これと關聯して注目されるのは、『楞伽經疏』の紙數については、最近公刊された七寺所藏「古聖教目録」(擬題)にも言及が見られ、そこでは、

「楞伽疏五卷 二百八十 達摩」

と記載されているということである。⁽⁵⁶⁾ この紙數は上の推定と大きく異なっているが、これは書寫の書式などが變更されたことによるのではない。というのは、同じく「古聖教目録」に記載されている菩提流支の「入楞伽經疏」の紙數は「二百八十七枚」で、正倉院文書に記載される紙數と完全に一致しているからである。⁽⁵⁷⁾ 非常に不可解なことであるが、これについては、恐らく、次のように考えることができるであろう。即ち、この記載は正倉院文書の目録、例えば「疏目録」(『大日本古文書』の編者によって「奉寫章疏集傳目録」という名稱が與えられている)の、

「楞伽經疏五卷 菩提達摩撰 百八十一張」⁽⁵⁸⁾

などの誤った張數の記載が本となり、それがやがて「二百八十一張」に誤られ、更に、その紙數の中から「空」の紙を除くことで得られたものであるとうことである。こうした誤りは、實際に紙數を調べて書いたのであれば生じようのないものであるから、この「古聖教目録」は、どこかの(既に誤りが記載されていた)一切經の目録を轉寫したものであることが窺い知られるが、實際のところ、この目録は、落合俊典氏によって承曆元年(一〇七七)に白河天皇

よって創建された法勝寺の章疏目録の寫しであろうと推定されているのである。⁽⁵⁹⁾ その推定が正しいとすれば、こうした事實の存在によつて、法勝寺の一切經の底本が南都系のものであった可能性は非常に大きいといわねばなるまい。

以上によつて、『楞伽經疏』の總紙數が二二二張であつたことは確認されたことと思われるが、栗原治夫氏によれば、「五月一日經」の場合、各紙二十四行、各行十七字、一紙當たり四〇八字が標準であつたようであるから、⁽⁶⁰⁾ 『楞伽經疏』の場合、卷第四の「空」一張を除くと、全二二〇張となり、その總字數は、おおよそ、

二二〇紙 × 四〇八字 = 八九七六〇字

ということになる。一方、『四卷楞伽』の分量は、大正新脩大藏經で、一〇三段+半段程度であるが、大正藏の一段は十六字詰め二十九行で、おおよそ四六四字であるから、

一〇三段+半段 × 四六四字 = 四八〇二四字

となり、『楞伽經疏』が『四卷楞伽』の約二倍の分量を有したことが推定できる。かなりの分量であるが、それでも、その逸文から見ても、遠意的な註釋であつたとは到底思われなから、經文の全てを掲げて註釋するには決して充分ではなかつたはずである。従つて、恐らくは、經文については一部を掲げて、その位置を示し、その部分の内容や語句について解説を加えるという形式であつたと推測される。

問題は、「四卷楞伽」の四巻と「楞伽經疏」の五巻がいかに對應するかということであるが、上に掲げた逸文からは、「四卷楞伽」の巻第一、巻第四が、それぞれ、「楞伽經疏」の巻第一、巻第五で扱われていたことが知られるのみで、これからでは、その對應關係は明らかにすることはできない。そこで假に全く同等の割合で註釋が書かれたと假定して、「四卷楞伽」「楞伽經疏」それぞれについて、各巻の全體に對する割合を比較してみると、次の《圖表3》のごとくになる。

《圖表3》

		卷	段數	百分率
四卷楞伽經	卷第一		27.5	26.6
	卷第二		25.5	24.6
	卷第三		23	22.2
	卷第四		27.5	26.6
	合計		103.5	100

		卷	紙數	百分率
楞伽經疏	卷第一		53	24.0
	卷第二		42	19.0
	卷第三		47	21.3
	卷第四		40	18.1
	卷第五		39	17.6
	合計		221	100

残念ながら、これによってもその對應關係を明確にすることはできないが、「四卷楞伽」の巻第四が分量的に最も多

いのに對して、「楞伽經疏」の卷第四、卷第五が比較的少ないことは注目すべきであり、あるいは、「四卷楞伽」の卷第一から卷第三までの各巻が「楞伽經疏」の卷第一から卷第三までの各巻で扱われ、「四卷楞伽」の卷第四は「楞伽經疏」の卷第四、卷第五の兩巻で扱われていたのではないかと疑われる。

2. 思想

逸文によって知られる「楞伽經疏」の教説のなかで、非常に興味深いものは、そこにしばしば言及されている獨自の心識説であろう。先ず、その構造を探ってみると、上のbの逸文では、

「心名採集業 意名廣採集 諸識識所識 現等境說五」

という經文の「心」「意」「識」「五」という言葉を、それぞれ、藏識（第八識）、第七識、第六意識、前五識に配しており、達摩の「楞伽經疏」が八識説を採っていたことが知られる。これは「楞伽經」自體が、例えば、

「佛告大慧。三種自性及八識。二種無我。悉入五法。大慧。彼名及相。是妄想自性。大慧。若依彼妄想生心心法。名俱時生。如日光俱。種種相各別。分別持。是名緣起自性。大慧。正智如如者。不可壞故。名成自性。復次大慧。自心現妄想八種分別。謂識藏意識及五識身。相者不實相妄想故。我我所二攝受滅。二無我生。是故大慧。此五法者。聲聞緣覺菩薩如來。自覺聖智。諸地相續次第。一切佛法。悉入其中。」⁽⁹¹⁾

というように、明確に八識を説いているのであるから當然とも言えるし、上の經文の「心」を藏識に、「意」を第七識に配することも、『四卷楞伽』自體の敘述からして全く問題がなく、『十卷楞伽』や梵本から見ても、基本的には正しいものと考えられる。⁽⁸⁾

心識説についても少し詳しく見てゆくと、eの逸文において、第八識が他の七識の所依であるから「識宅」と呼ばれるといい、更に、それを「如來藏」に等置していることが注目される。従って、これら二つの逸文によれば、『楞伽經疏』の心識説は、

- 第八識 || 藏識 || 如來藏 || 心
 第七識 || || || 意
 第六識 || 意識 || || 識
 前五識 || 眼耳鼻舌身識 || || 五

とならざるをえないはずである。

ところが、不思議なことに、dの逸文では「心」を「法智心」に當てて、「意」とともに第七識に配しているのを見ることができるのである。従って、この逸文によれば、その心識説は次のようなものとならざるを得ないであろう。



第六識 〓 意識 〓 識

前五識 〓 眼耳鼻舌身識 〓 五

ここで「心」を「法智心」としているのは、珍海の言うように、「勝鬘經」に、

「世尊。若無如來藏者。不得厭苦樂求涅槃。何以故。於此六識及心法智。此七法刹那不住。不種衆苦。不得厭苦樂求涅槃。」

と説かれる「心法智」に基づくものに他ならないであろう。「心法智」の原語は明らかでなく、元來は單に「意根」の意であったとも言われるが、恐らく、ここでは淨影寺慧遠（五三三—五九二）が『勝鬘經義記』で、

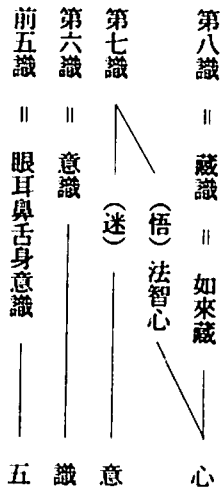
「於此六識及心法智。舉其妄心。六是事識。及心法智是第七識。迷時名心。解名法智。」

と解しているのと同様、第七識が悟りによって轉換を遂げた時の名稱として扱われているのであろう。しかるに、地論宗南道派では、一般に、

第八識 〓 如來藏 第七識 〓 心 第六識 〓 意 前五識 〓 識

という心意識の配當を行っているのであるから、「心」を第七識とし、そこにおいて「心法智」を捉えんとすることに特に問題は生じないのであるが、『楞伽經疏』では先に見たように、既に「心」を第八識に、「意」を第七識に配當しているのであるから、ここで「心」と「意」の雙方を第七識の異名とするのは全くの矛盾であるし、地論宗南道派の説とも合致しないものとなってしまっているのである。

これは全く不可解なので、あるいは逸文の「心意者皆七識也」は、「意者七識也」の誤りではないかとも疑われるのであるが、『八識義章研習抄』に二箇所見える珍海の引用の仕方を検討するに、いずれの場合も、第七識を「心」(「法智心」と「意」から成る眞妄和識と見て、それを「如來藏識」(第八識)から區別している例として、この文章が掲げられていることとくであり、そうしたことは考えにくい。従って、もし我々が兩所の説を會通しようとするなら、『楞伽經疏』の心識説として、次のようなものを想定せざるを得なくなるはずである。



しかしながら、このような説は外には全く知られておらず、果たしてこうした心識説を前提として註釋を行っているたかどうか甚だ疑わしい。むしろ、それよりも考えられることは、この註釋書の著者が、元來起源を異にする二つの

教説を採用するに當たつて、兩者間の矛盾を十分に咀嚼し、調停することなく用いたために、そうした不備を遺してしまつたことであろう。つまり、こうした混亂は、『楞伽經』そのものが本來提起する心識説の中に、それと矛盾する地論宗南道派の心識説を安易に導入したために生じたものと考えられるのである。

『楞伽經疏』の心識説については、外に、aの逸文によつて、『流注生住滅』『相生住滅』といった「識の二種の生住滅」に對する理解の一端を知ることができるが、それは、

流注生住滅 〓 無始以來。識流注相續不斷

相生住滅 〓 生死諸根滅

というもので、「相生住滅」を「悟」、「流注生住滅」を「迷」に配する二元的解釋を採るものごとくである。

しかるに、高崎直道氏によれば、『楞伽經』のこの部分は識生滅のメカニズムを説明したもので、「阿梨耶識」〓「如來藏」に虚妄分別(業相)が現われると轉識が生じ、逆にそれが除かれたとき、轉識が消滅するというのが「相生住滅」であり、一方、轉識を繼起させる要件としての「無始妄想熏」「自心見等識境妄想」の有無によつて轉識の有無が規定されるとするのが「流注生住滅」であるといふ。つまり、兩者は轉識の生住滅を異なつた側面から説明したものに過ぎないのであるから、「流注生」〓「相生」、「流注住」〓「相住」、「流注滅」〓「相滅」となる道理である。この高崎氏の解釋が正しいとすれば、『楞伽經疏』の解釋は甚だ奇怪なものと言わねばならないであろう。兩者とも「生住滅」が問題であるのに、「流注生住滅」においては、「滅」が全く無視され、一方、「相生住滅」においては、「生住」が完全に脱落しているからである。また、この註釋では、「流注生住滅」が「識」と、「相生住滅」が「根」と結びつけら

れているわけであるが、この理由も必ずしも明確ではない。⁽⁷⁾

このような解釋の存在は、『楞伽經疏』が、少なくとも教學的な面では、その内容にかなり杜撰な點があったことを示すものと言えよう。しかしまた、『楞伽經疏』のこうした側面は、あるいは、その作者が教理的な整合性には必ずしも拘泥しない實踐的な佛教者であったことを示唆するものなのかも知れない。

四、『楞伽經疏』の成立について

本書の成立について先ず問題となるのは、果たしてこれを、言われるごとく菩提達摩の著作として認め得るかということである。本書には、この逸文に見るように『賢愚經』からの引用が見え、また、先に言及したように、『勝鬘經』に依據している部分が存在する。『賢愚經』は、僧祐の『出三藏記集』卷第二によれば、涼州の沙門、曇摩耶威徳らが劉宋の文帝(四二四―四五三)の時、干闥で原典を得、元嘉二年(四四五)、高昌郡で翻譯して十三卷としたとされ、⁽¹²⁾また、『勝鬘經』は、同じく『出三藏記集』によって、『四卷楞伽』の譯者でもある求那跋陀羅が、元嘉十三年(四三六)に丹陽で翻譯したものとされている。⁽¹³⁾一方、菩提達摩の生歿年は明らかではないが、熙平元年(五一六)に靈太后が建て、永熙三年(五三四)に焼失したという永寧寺の塔を連日拜んでいたと『洛陽伽藍記』卷第一に傳えるし、⁽¹⁴⁾續高僧傳によれば、弟子の慧可は、達摩に學んだ後、天平(五三四―五三七)の初めに「新鄭」に赴き、「盛んに祕苑を開いた」というから、⁽¹⁵⁾達摩の活躍期は、五二〇年―三〇年頃と見るべく、その著作に漢譯の『勝鬘經』や『賢愚經』の影響が窺えるということは、少なくとも時代的には何ら問題はない。

しかしながら、本拙稿の冒頭で述べたように、達摩と『楞伽經』が關係づけられたのは、達摩と『二入四行論』が

結びつけられた後のことに屬すると思われるし、常識的に考えれば、インド人が『勝鬘經』等の漢譯經典をそのまま用いるなどといったことは、ありそうにないことである（もともと、これは、求那跋陀羅譯の『楞伽阿跋多羅寶經』に對して菩提達摩が註釋を書いたとする『楞伽經疏』の設定それ自體が既に孕んでいる問題でもある）。また、『續高僧傳』の時点でこれが既に達摩のものと認められていたとすれば、必ずや慧可傳、あるいは法沖傳で言及されたはずであるから、到底、これを達摩本人の著作と認めることはできないと思われる。

次に問題とすべきは、その成立時期がいつかということであるが、達摩と『楞伽經』の關係を力説する『續高僧傳』に言及がないということは、これを考えるうえで非常に示唆的ではある。しかし、それだけで、その成立が『續高僧傳』以降であると斷じ得るわけではない。何故なら、その時点で存在していても、未だ一般の承認を得るまでには至らなかったということも考えられるし、當時、既に存在した別の人物の著作が、後に達摩に假託されたという可能性も否定できないからである。

そこで、先ず書誌學的な見地から成立時期を考えてみると、その上限は、所引の『賢愚經』が譯された元嘉二十二年（四四五）、下限は、正倉院文書によって『西宅本』の存在が確認できる天平十二年（七四〇）ということになるが、これではあまりに範圍が廣いので、思想的な見地から更に絞っていく必要がある。そこで注目すべきは、先に言及したように、『楞伽經疏』の心識說に淨影寺慧遠と共通するものが認められるということである。慧遠の『大乘義章』⁽¹⁶⁾「八識義」によれば、第七識に「智」（緣智）を認めるのは、地論宗南道派に特有の説であったようであるから、『楞伽經疏』がその影響を受けた可能性は非常に高い。しかし、ここで問題となるのが、地論宗において、この説がいつ確立されたかが明らかではないということである。確かに、現存する資料において、第七識における「智」の存在を認め、それを「心法智」と等置しているのは慧遠のみであるが、師の法上（四九五—五八〇）においても、少なくとも「緣智」

の存在は承認されているから、それが「勝鬘經」の「心法智」と結びつけて理解されていたということも十分にあり得るし、法上以前に既にこうした考え方が形成されていた可能性すら否定できないのである。従って、確かなことは言い得ないのであるが、慧遠⁽⁷⁷⁾法上の時代、即ち、六世紀中葉には、この思想が確立されていたことは間違いない。「楞伽經疏」がその影響を蒙ったとすれば、その成立も、それ以降と見てよいのではないだろうか。

ところで、上に見たような地論宗の心識説は、如來藏思想の流行と、組織的な唯識説が十分には伝わっていなかったという状況の中で、種々の模索を経て形成されたものであり、中國における獨自の展開と言えるのであるが、こうした思想は、恐らく、貞觀十九年(六四五)の玄奘(六〇二—六六四)の歸朝に伴う法相宗の形成によって大きなダメージを受けたものと推測される。従って、それ以降には、こうした著作は生まれようがなかったはずである。だとすれば、その成立は六世紀中葉から七世紀中葉にかけてのおよそ百年間のことと見て大過ないのではあるまいか。

『楞伽經疏』が「菩提達摩」の撰述であることを主張している以上、菩提達摩の兒孫をもって任じていたある人物がその成立に深く関わっていたことは疑いえない。しかし、そうした事實は必ずしも直ちに地論宗の人々の著作であることを否定するものではない。何故なら、地論宗に屬する人の既存の著作が、後に達摩系の人々によって達摩の著作に擬えられた可能性も否定できないからである。

しかし、先に見た「心意識」の配當のように、『楞伽經疏』には地論系統の説とは矛盾する要素が見られるということとは注目すべきであろう。地論宗南道派では、慧遠に見られるように、⁽⁷⁸⁾眞諦の譯書の流布以降も特異な「心意識」の配當が行われていた。そして、その傳統は玄奘の歸朝まで維持されたものと考えられるから、『楞伽經疏』の心意識説を地論説の發展と見ることは困難であり、この『楞伽經疏』がもと地論宗の著作であったということも非常に考えにくいように思われる。⁽⁸⁰⁾

當時、達摩の兒孫をもって任じた人々としては、道信（五八〇—六五二）、弘忍（六〇二—六七五）らの、いわゆる「東山法門」系の人々と、『續高僧傳』の法冲傳に系譜の掲げられている「楞伽宗」系の人々とが存在したわけであるが、少なくとも、今日傳わる東山法門の人々の著作には、この「楞伽經疏」において重要な位置を占めている教學的な知識のごときは全く見ることができないから、彼らが直接このようなものを製作したということは非常に考えにくいように思われる。それに對して楞伽宗では、法冲傳に、

「可師後。善師 出抄四卷 豐禪師 出疏五卷 明禪師 出疏五卷 胡明師 出疏五卷 遠承可師後。大聰師 出疏五卷 道蔭師 抄四卷 冲法師 疏五卷 岸法師 疏五卷 龍法師 疏八卷 大明師 疏十卷」⁽⁸¹⁾

と述べられているように、『楞伽經疏』や『楞伽經抄』といった「楞伽經」の註釋書が盛んに作られたことが知られている。従つて、達摩の「楞伽經疏」の作者として先ず第一に想定されねばならないのは、やはり楞伽宗の人々である。しかし、その場合でも、

I. 楞伽宗において、初めから宗祖の達摩の著作として製作された

II. 楞伽宗の何者かの既存の著作が、後に達摩に假託された

という二つが考えられるであろうし、後者の場合、東山法門においても「楞伽經」の傳統が強調されるようになったのであるから、更に、

- a. 楞伽宗の人々によって假託された
- b. 東山法門の人々によって假託された

という二つの可能性を考えなくてはなるまい。

現時点では、これ以上の考察は難しいが、『賢愚經』などの古い經典が典據として利用されているのは、あるいは、『菩提達摩撰』に擬えるために、そうしたものが故らに選ばれたと見做しうるのではあるまいか。

むすび

達摩撰という『楞伽經疏』の内容や成立については、資料の制約のため、なお多くの問題が残されているが、上來の考察によって、以下のような諸點は明らかにしえたように思う。

1. 六世紀中葉から七世紀中葉にかけてのある時期に、楞伽宗の人々によって菩提達摩に假託して製作された可能性が考えられる。
2. 心識説などの教學的な問題が重要な部分を占めている。
3. 心識説には、第八識を「心」、第七識を「意」とするなど、『楞伽經』の正確な理解に基づくものが認められる反面、第七識を「心」とし、そこに「法智心」を認めるなど、地論宗南道派の影響と見做せるものが含ま

れており、兩者の調停は十分には成し遂げられてはいない。

4. 教理上の不備がかなり見られた模様で、製作者はそうした整合性には必ずしも拘泥していなかったごとくである。

菩提達摩に假託された『楞伽經』關係の著作は、この『楞伽經疏』に限られる譯ではない。正倉院文書や「古聖教目錄」によって古くに日本に傳わっていたことが確認できる『楞伽經科文』や、『楞伽師資記』に記載されている『楞伽經』の綱要書などの文献が、かつて存在していたことが知られるのである。これらの内容や成立については全く分からないのであるが、この『楞伽經疏』と多くの點で共通するところがあったのではないかと疑われるし、また、楞伽宗の系統において、次々と生み出されたとされる『楞伽經疏』や『楞伽經抄』の内容も、恐らくはこの達摩の『楞伽經疏』のごときものであったと考えられるのである。とすれば、われわれは、當時、独自の活動を展開しつつあった東山法門の實踐中心の立場との間に大きな懸隔を感じざるを得ないであろう。

別に論及したように、東山法門の思想自體は決して新しいものではなかった。にも拘わらず、それが多くの人々の眼に新鮮に映ったのは、彼らだけが思想の組織化や教學的基礎付けの必要性を認めず、生のままの禪觀體驗をそれが事實であるというだけで肯定し、絶對化し得たという點にこそあったといべきなのである。しかし、達摩の『楞伽經疏』より判断する限り、楞伽宗の人々の著作には、そうした面は全く認められなかったと考えられるのである。この後、東山法門と楞伽宗は、全く異なる展開を辿った。東山法門が次第次第に隆盛に向かったのに對して、法沖以後、楞伽宗はその跡を完全に絶ってしまうのである。このような命運の相違は、恐らく、そうした兩者の性格の相違そのものに由来すると見るべきなのである。

(52) 正倉院文書の寫經關係文書に記された「空」の意味については、栗原治夫氏によって「用紙數に入れられるべきものではあるが、實際には文字の書かれていない空白の紙を指している。當然布施の對象からは、はずされる」(奈良朝寫經の製作手順)〔坂本太郎博士古稀記念會編「續日本古代史論集」中巻、吉川弘文館、一九七二年〕六四七頁)、あるいは、「空とあるのは巻末にあつて全く空白であるか、或は書寫が一行乃至數行しか行われず、布施の單位としては切り捨てられるが、實際には軸を付ける際などに必要な用紙をさすことがわかる」(同上、六四八頁)と説明されている。

(53) 「疏目錄」(『大日本古文书』卷第十二、五一—三頁)、「奉寫章疏集傳目錄」(同、五—三頁)、「寫了律論疏章集傳等報」(卷第二、二五一頁)を参照。

(54) 『大日本古文书』卷第八、三四—五頁。この文書では、「楞伽經疏」の内の三巻(第二巻、第三巻、第五巻)が「百八十紙」であるかのごとくに記されているが、「常疏校報」において、この三巻の紙數を初め「百八十一枚」とした後、「二百二十八」に改めていることから知られるように(『大日本古文书』卷第八、三八—七頁)、これは明らかに誤りであり、第四巻を除いた四巻の紙數と見るべきである。なお、この文書については、皆川氏前掲論文(上篇(本誌前號所收)の註14参照)の五一—七頁を参照。

(55) 牧田諦亮監・落合俊典編「中國・日本經典章疏目錄」(七寺古逸經典研究叢書第六巻、大東出版社、一九九八年)一八八頁。
 (56) これについては、最近、落合俊典氏より御教示頂いた。ここに記して感謝の意を表す。なお、この記載は本論文の上篇において論じた「楞伽經疏」の傳承とも絡む問題であり、その部分についても加筆が必要であるが、別の機会を期することにす。

(57) 正倉院文書については、「奉寫章疏集傳目錄」(『大日本古文书』卷第十二、五—三六頁)などを参照。また、「古聖教目錄」については、前掲「中國・日本經典章疏目錄」一八八頁を参照。なお、この菩提流支の「入楞伽經疏」については別に詳しく論ずる豫定である。

(58) 『大日本古文书』卷第十二、五一—三頁。

- (59) 落合俊典「平安時代における入藏録と章疏目録について」(前掲「中國・日本經典章疏目録」所收) 四七六頁、四九四頁。
- (60) 前掲「奈良朝寫經の製作手順」六四〇頁、六四四〜五頁を参照。
- (61) 大正藏一六、五一一中。
- (62) bの逸文で註釋されている經文の少し前の部分には、「海水起波浪。七識亦如是。心俱和合生。譬如海水變。種種波浪轉。七識亦如是。心俱和合生」(大正藏六、四八四中)と見え、「心」を「七識」から區別しているから、これを第八阿梨耶識に配當することは、經文自體から當然導き出し得る結論であると言える。従つて、「意」を第七識に充てることに對しても、何ら疑問とすべき點はない。なお、これについては、前掲「華嚴教學の研究」(上篇(本誌前號所收)の註10参照) 三八二頁、並びに勝又俊教「仏教における心識說の研究」(山喜房佛書林、一九六一年) 六五七〜六〇頁を参照。
- (63) 前掲「仏教における心識說の研究」六五八頁参照。
- (64) 珍海は「八識義章研習抄」において、「楞伽經疏」のこの文章を引いた上で、「考之。正是引勝鬘說解楞伽耳」と述べている(「附録」のB-4を参照)。
- (65) 大正藏二一、二二二中。
- (66) 高崎直道『如來藏思想の形成』(春秋社、一九七四年) 三五三〜六頁参照。
- (67) ペリオ二〇九一號。これは、吉藏の「勝鬘經寶窟」で「有人」の説として掲げられるものであり、従來から珍海の「八識義章研習抄」によって、淨影寺慧遠の「勝鬘經義記」卷下の説の引用であるとの推定は可能であったが、近時、敦煌本「勝鬘經義記」の出現によって、それが確認された。「附録」B-4の「八識義章研習抄」の文章、並びにB-4の註5、註6、藤井教公「Pelilot Ch. 2091『勝鬘義記』卷下殘卷寫本について」(「聖徳太子研究」一三、一九七九年) 三五頁などを参照。
- (68) これについては、前掲「華嚴教學の研究」三八〇頁、三八二頁、前掲「仏教における心識說の研究」六五七〜八頁、六七五〜六頁などを参照。
- (69) 「附録」のB-3、並びにB-4を参照。
- (70) 高崎直道『楞伽經』(佛典講座17、大藏出版、一九八〇年) 一四〇〜六頁参照。
- (71) 湛喜は「起信論義記教理抄」において、これを評して「此釋者。流注生滅約心法。相生滅約諸根。分別二種生滅見」と言、

ている〔附録〕のC-1を参照。

(72) 大正蔵五五、一二二下。

(73) 『出三藏記集』卷第九所收の慧觀作「勝覺經序」(大正蔵五五、六七中)、並びに卷第一四所收の「求那跋陀羅傳」(同上、一〇五下)を参照せよ。ただし、『賢愚經』の引用部は、高麗本にはない部分であるから、當初から存在したかどうか問題を残している。

(74) 大正蔵五一、一〇〇〇中。

(75) 大正蔵五〇、五五二上。

(76) この「縁智」の説は、地論宗北道派の激しい批判の対象となったものであり、このことから、これが南道派に特有のものであったことが窺われる。北道派の批判については、『佛教學』四〇號(一九九八年)に掲載の拙稿「地論宗北道派の心識説について」を参照されたい。

(77) 青木隆「地論宗南道派の眞修・縁修説と眞如依持説」(『東方學』九三、一九九七年)三七頁。

(78) これについては、前掲『華嚴教學の研究』三八〇～九六頁、前掲『仏教における心識説の研究』六五七～七七頁などを参照。

(79) 慧遠は、『大乘義章』卷第三末「八識義」において、「起信論」と『楞伽經』とでは心識説に大きな違いがあるとして、次のように述べ、「起信論」の説を採用していない。

「有人問説。眞識名心。妄識名意。事名意識。便言。小乘七心界中意根界者。是第七識。對治此執。……問曰。妄識若非意根。何故楞伽馬鳴論説爲意乎。釋言。彼乃借名顯示。非即意根。如楞伽中説第七識以之爲心。馬鳴論中宣説眞識以之爲心。豈可名同便是一物。心名雖同。眞妄兩別。意名雖一。何妨差別。」(大正蔵四四、五三九上)

ここで言及されているように、「起信論」では「心意識」を、第八識Ⅱ「心」、第七識Ⅱ「意」、第六識Ⅱ「意識」とするのであるが、この配當は、連摩の『楞伽經疏』のbやeの逸文によって再構成される心識説とよく一致する。しかし、「起信論」自体が『楞伽經』の影響下に成立したと考えられるのであるから、こうした事實によって『楞伽經疏』が「起信論」を前提としていると結論づけるのは早計に過ぎると言わなくてはならないであろう。少なくとも『楞伽經疏』の現存する逸文の中に『起信論』の直接的な影響を指摘することは困難であるし、先述のごとく、『楞伽經疏』の心識説は『楞伽經』の本文自体から

導出しうるのであるから、その思想的根據として、わざわざ「起信論」を持ち出す必要はないと思われる。

(80) 眞諦による「攝大乘論」の麟湖と流布によって、地論宗は、その影響を大きく蒙ることとなり、地論宗の攝論化が推し進められたと考えられる。しかし、南道派に獨特な心・意・識の配當に對する影響は必ずしも大きなものではなかったと思われる。というのは、前掲の拙稿「地論宗北道派の心識説について」で論じたように、この思想自體が、如來藏思想に立脚する南道派の基本的立場と密接に結びついており、容易には改めがたいものであるうえに、眞諦の心・意・識の配當が、

六識 〓 心 第七阿陀那識 〓 意 第八阿梨耶識 〓 識

という、他に全く例を見ない極めて特異なもので（前掲「華嚴教學の研究」三八〇—一頁を参照）、傳統説と會通しがたいものであったからである。

(81) 大正藏五〇、六六六中。

(82) 「楞伽經科文」については、既に上篇（本誌前號所收）の註12において言及しておいた。一方、達摩に歸せられる「楞伽經」の綱要書については、淨覺の「楞伽師資記」に「此四行是達摩禪師親説。餘則弟子曇林記師言行。集成一卷。名之達摩論也。菩提師又爲坐禪衆。翻楞伽要義一卷。有十三紙。亦名達摩論也。此兩本論。文理圓淨。天下流通。自外更有人僞造達摩論三卷。文繁理散。不堪行用」と記されている（禪の語録2、柳田聖山「初期の禪史」1、筑摩書房、一九七一年、一三三頁）。

(83) 前掲「再び「心王經」の成立を論ず」（上篇（本誌前號所收）の註6参照）の九四—八頁を参照。

附 録

以下、参考のために、「附録」として、多少の攷證とともに菩提達摩の「楞伽經疏」を引用する諸文献を列挙しておく。

A. 安然（八四一—八九八）『悉曇藏』卷第二（元慶四年（八八〇）撰）

1. 「八聲八音六十四音者。次第記云。唯此梵文。前劫後劫。六十四種之梵音文。遠磨楞伽經疏抄云。古德傳云。八種梵音各有八種聲。八八六十四種音性。八梵音者。一最好聲。二易了聲。三濡軟聲。四調和聲。五尊貴聲。六不誤聲。七深妙聲。八不女聲。賢愚經云。有八種聲。一鳥聲。其人受性。不識恩養。惠不廉潔。二三尺鳥聲。其人受性凶暴。樂爲傷害。少於慈順。三破男作女聲。破女作男聲。其人薄德貧窮下賤。四鴉聲。其人性僂了。多於親友。將接四遠。五鼓聲。其人言辭辯捷。解釋道理。必爲國師。六出聲。其人智慧深遠。散折法性。任化天下。七金鈴聲。其人巨富饒。則必積千億兩金。八梵聲。其人福德彌高。若在家者。作轉輪王。出家學道。必得成佛文。今見前七。非佛音聲。何得相具。佛梵音中。當以八轉聲相具八梵音。則成八八六十四種梵音。言八轉聲者。亦名七例句。除第八呼聲文。（大正藏八四、三八四中下）

(1) この箇所は、安然自身が、これに先だつて「夫音聲者。四大四微之所擊發。四方四時之所合應。分成三聚之聲。聚爲三科之悟。衝五輪而生。隨二息而出。觸七處而起。經五處而鳴。隨五行而轉。能成四和二體。而發四韻四聲一十四音。巧作八聲八音之六十四音。或與四時合。或與四方合。應開三密門。會三平等」（三八二下）と述べたのを、自らその一句一句について解説している部分である。

(2) 「次第記」は、安然の「悉曇十二例」に「全真相公次第記云」として、しばしば引用されているものであろうが、安然自身の著作である「諸阿闍梨真言密教部類總錄」（八八五年）にも見えず、未詳。

(3) 北魏の慧覺等譯「賢愚經」卷第六、「快目王眼施緣品第二十七」の冒頭に「如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時尊嚴。大衆圍遶。而爲說法。城中人民樂聽法者。往至佛所。前後相次。時城中有盲婆羅門。坐街道邊。聞多人衆行步駛疾。即問行人。此多人衆欲何所至。行人答曰。汝不知耶。如來出世。此難值遇。今在此國敷演道化。我等欲往聽其說法。

此婆羅門而有一術。衆生之中有八種聲。悉能別識知其相緣。何謂八種。一曰鳥聲。二曰三尺鳥聲。三曰破聲。四曰鴉聲。五曰鼓聲。六曰雷聲。七曰金鈴聲。八曰梵聲。其鳥聲者。其人受性。不識恩養。志不廉潔。三尺鳥聲者。受性凶暴。樂爲傷害。少於慈順。其破聲者。男作女聲。女作男聲。其人薄德貧窮下賤。其鴉聲者。志性動了。多於親友。將接四遠。其鼓聲者。言辭辯捷。解釋道理。必爲國師。其雷聲者。智慧深遠。散折法性。任化天下。金鈴聲者。巨富總財。其人必積千億兩金。其梵聲者。福德彌高。若在家者。作轉輪聖王。出家學道。必得成佛。時婆羅門語行路人。我能識別人之語聲。若實是佛。當有梵音。汝可將我往至其所。當試驗之。審是佛不。時行路人。因牽將往。漸近佛所。聞佛說法。梵音具足。深遠流暢。歡喜踊躍。兩目得開。便得見佛。紫磨金色。三十二相。明明如日。即時禮佛。喜慶無量。佛爲說法。志心聽受。即破二十億惡。得須陀洹。已得慧眼。便求出家。佛言善來。便成沙門。佛重方便。廣爲說法。即復尋得阿羅漢果。一切衆會。莫不奇怪。(三九〇中下)と見える(ただし、この部分は高麗本には存在しない)。従つて、『悉曇藏』(大正藏本)の「惠不廉潔」の「惠」は「志」の誤り、また、「三尺鳥聲」の「鳥」は「烏」の誤りと知られる。

(4) これは、『四卷楞伽』卷第三の「爾時。大慧菩薩白佛言。世尊。何故世尊於大衆中唱如是言。我是過去一切佛及種種受生。我爾時作漫陀轉輪聖王。六牙大象及鸚鵡鳥。釋提桓因。善眼仙人。如是等百千生經說。佛告大慧。以四等故。如來應供等正覺。於大衆中唱如是言。我爾時作拘留孫。拘那含牟尼。迦葉佛。如何四等。謂字等語等法等身等。是名四等。以四種等故。如來應供等正覺。於大衆中唱如是言。云何字等。若字稱我爲佛。彼字亦稱一切諸佛。彼字自性無有差別。是名字等。云何語等。謂我六十四種梵音言語相生。彼諸如來應供等正覺亦如是。六十四種梵音言語相生。無增無減無有差別。迦陵頻伽梵音聲性。云何身等。謂我與諸佛法身及色身相好。無有差別。除爲調伏彼彼諸趣差別衆生故。示現種種差別色身。是名身等。云何法等。謂我及彼佛得三十七菩提分法。略說佛法無障礙智。是名四等。是故如來應供等正覺。於大衆中唱如是言」(大正藏一六、四九八中下)という箇所に対する註釋と考えられる。

(5) この『悉曇藏』の文章は、了尊(生歿年未詳)の『悉曇輪略圖抄』(二二八七年)卷第六に「藏三云。達磨楞伽經疏抄云。古德傳云。八種梵音各有八種聲。八八六十四種音性。八梵音者。一最好聲。二易了聲。三濡軟聲。四調和聲。五尊貴聲。六不誤聲。七深妙聲。八不女聲。又云。佛梵音中。常以八轉聲相具八梵音。則成八八六十四種梵音。言八轉聲者。亦名七例句。除第八呼聲」(大正藏八四、六八五上)と引用され、また、泉寶(一三〇六一三三六)説、賈寶(一三三三三)

一三九八) 記の「理趣釋秘要鈔」卷第四にも「六十四種梵音者。悉曇藏第三云。連磨楞伽經疏鈔云。古德傳云。八種梵音。各有八種聲。八八六十四種音性。八梵音者。一最好聲。二易了聲。三濡軟聲。四調和聲。五尊貴聲。六不誤聲。七深妙聲。八不女聲。當以八轉聲相具八梵音。即成八八六十四種梵音文」(大正藏六一、六八二下)と引用がある。これらによって、「悉曇藏」(大正藏本)の「八梵音」は「八梵音者」の、また、「當以八轉聲」は「當以八轉聲」の誤りであることが知られる。

B. 珍海(？—二五二)「八識義章研習抄」(保安元年(一一二〇)撰)

1. 「訓云⁽¹⁾。阿梨耶者。天竺之語。此方之人言無沒者。正當其言。故爲正翻。餘藏等名。以別義翻。非正對言。故爲傍翻。於中無沒通於其相離分二門云云。俱有梨耶名故。以正翻故。……言眞識者。阿跋二云。略說「有」三種識。廣說有八相。何等「爲」三。謂眞識現識及分別事識⁽²⁾已下。論自釋言等者。起信論釋心眞如云。此眞如體。無有可遣。以一切法悉皆眞故。亦無可立。以一切法皆同如故⁽³⁾已上。今見此文。言雖少異。其義實同。章主引文多分皆爾。言宅識者。阿跋四云。意識之所起。識宅意所住⁽⁴⁾。連磨釋云。八識爲七識爲七識等依之而住故。名如來藏依識宅⁽⁵⁾已下。轉識論云。亦名宅識。一切種子之所栖處⁽⁶⁾已下。」(卷上、大正藏七〇、六五二上—下)

(1) これは、淨影等慧遠「大乘義章」卷第三末「八識義」の「阿梨耶者。此方正翻名爲無沒。雖在生死不失沒故。隨義傍翻。名別有八。一名藏識。如來之藏爲此識故。是以經言。如來之藏名爲藏識。以此識中涵含法界恆沙佛法。故名爲藏。又爲空義所覆藏故。亦名爲藏。二名聖識。出生大聖之所用故。三名第一義識。以殊勝故。故楞伽經說之以爲第一義心。四名淨識。亦名無垢識。體不染故。故經說爲自性淨心。五名眞識。體非妄故。六名眞如識。論自釋言。心之體性無所破故。名之爲眞。無所立故。說以爲如。七名家識。亦名宅識。是虛妄法所依處故。八名本識。與虛妄心爲根本故。名別如是」(大正藏四四、

五二四下(五上)に對する解説である。

(2) 『四卷楞伽』卷第一に「大慧。略說有三種識。廣說有八相。何等爲三。謂眞識現識及分別事識。大慧。譬如明鏡持諸色像。現識處現亦復如是。大慧。現識及分別事識。此二壞不壞。相展轉因。大慧。不可思議薰。及不思議變。是現識因。大慧。取種種塵。及無始妄想薰。是分別事識因」(大正藏一六、四八三上)と見える。

(3) 眞諦譯『大乘起信論』に「心眞如者。即是一法界大總相法門體。所謂心性不生不滅。一切諸法。唯依妄念。而有差別。若離妄念。則無一切境界之相。是故一切法。從本已來。離言說相。離名字相。離心緣相。畢竟平等。無有變異。不可破壞。唯是一心。故名眞如。以一切言說假名無實。但隨妄念不可得故。言眞如者。亦無有相。謂言說之極。因言遣言。此眞如體。無有可遣。以一切法悉皆眞故。亦無可立。以一切法皆同如故。當知一切法。不可說不可念故。名爲眞如」(大正藏三三、五七六上)と見える。

(4) 『四卷楞伽』卷第四に「爾時。世尊。欲重宣此義。而說偈言。三乘亦非乘。如來不磨滅。一切佛所說。說離諸過惡。爲諸無間智。及無餘涅槃。誘進諸下劣。是故隱覆說。諸佛所起智。即分別說道。諸乘非爲乘。彼則非涅槃。欲色有及見。說是四住地。意識之所起。識宅意所住。意及眼識等。斷滅說無常。或作涅槃見。而爲說常住」(大正藏一六、五三三)と見える。

(5) この文章は、このままでは意味が通じない。恐らく「八識爲七識等依之而住故。名如來藏爲識宅」の誤りであろう。

(6) 眞諦譯『轉識論』の冒頭に「識轉有二種。一轉爲衆生。二轉爲法。一切所緣不出此二。此二實無。但是識轉作二相貌也。次明能緣有三種。一果報識。即是阿梨耶識。二執識。即阿陀那識。三取識。即是六識。果報識者。爲煩惱業所引。故名果報。亦名本識。一切有爲法種子所依止。亦名宅識。一切種子隱伏之處」(大正藏三一、六一)と見える。

2. 「訓云。楞伽文者。阿跋一云。心名採集業。意名廣採集。諸識識所識。現等境說五已上。集起之本。故說爲心者。妄境集起。以心爲本。由心分別。妄想起故。此即以本顯末。緣慮取境之義。以釋心也。……次言所識現

等境者。舉所了境。以成識義。言說五者。舉其數別。以顯諸也。問。經上文曰。七識亦如是。心俱和合生已。此說七識與真心俱。乘此文勢方言。諸識心如是。異亦不可得。心名採集業等。故知。此文真識名心。又楞伽經文說。心意意識及以五識。如總品云。心能造諸業。意是能分別。意識能知法。五識虛妄見。如是非一。故知。此中亦說此四。故達磨法師。以藏識爲心。七識爲意。意識爲識。疑說眼等字爲五。此釋開四。善契首尾。真識名心。甚順文勢。云何成立章主意耶。答。心意識名實通諸識。故攝論疏第二曰。就通以辨。三識皆有心意識義。今就隱顯三名各別。又以八種俱名爲識三。又下文云。心聚法中。總名心法。十二處中合爲意處。名雖同。眞妄兩別。意名雖一。何妨差別。故處處文作種種說。或說第八說名爲心。如彼心俱和合生文。或說妄識說名爲心。如入楞伽第七卷云。餘七識者。一心一意意識等。勝鬘經云。及心法智。起信論云。心滅即種種法滅。攝大乘論云。佛說心名。此名目第二識。如是非一。或說四種。或說共相。或說離分。或唯說妄識。或通說眞妄。如是異說。不可一途。爾今此文。以現境五。顯其諸識。言不攝第六。以此推之。上二句說六七識也。又說第七名業相識。採集業稱。正當此義。故菩提流支。既以心能集諸業之文。解業相識。即釋心能集諸業文。云第七識。爾達磨釋亦統一途。不須和會。」(卷中、大正藏七〇、六六五中(六上))

(1) これは、淨影寺慧遠「大乘義章」卷第三末「八識義」の「一開妄合眞。以說四種妄中分三。五識爲二。妄識爲三。故楞伽云。心爲採集業。意爲廣採集。諸識識所識。現等境說五。第七妄識。集起之本。故說爲心。依此集起。一切妄境。隨而分別。名採集業。第六意識。遍司諸障。故說爲意。通司六障。名廣採集。五識之心。隨境別了。名爲諸識。現在五塵。名識所識。唯知現在五塵境別。不通過未。故云現等境五也。妄分此三。此妄所依。即是眞識。通別爲四」(大正藏四四、五三〇上)に對する解説である。

(2) 「四卷楞伽」卷第一に「爾時。世尊。欲重宣此義而說偈言。譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。藏識海

常住。境界風所動。種種諸識浪。騰躍而轉生。青赤種種色。珂乳及石蜜。淡味衆華果。日月與光明。非異非不異。海水起波浪。七識亦如是。心俱和合生。譬如海水變。種種波浪轉。七識亦如是。心俱和合生。謂彼藏識處。種種諸識轉。謂以彼意識。思惟諸相義。不壞相有八。無相亦無相。譬如海波浪。是則無差別。諸識心如是。異亦不可得。心名採集業。意名廣採集。諸識識所識。現等境說五」(大正藏一六、四八四中)と見える。

(3) 註2の二重下線部を参照。

(4) 「四卷楞伽」卷第四に「大慧。善不善者謂八識。何等爲八。謂如來藏名識藏。心意意識及五識身。非外道所說」(大正藏一六、五一二中)と見える。なお、この文章は、後にもしばしば言及される(B-3、B-4)。

(5) 「十卷楞伽」卷第九に「如背赤及鹽。珂乳及石蜜。新果諸花等。如月諸光明。非一亦非異。如水中洪波。如是七識種。共於心和合。如大海轉變。是故波種種。阿梨耶亦爾。名識亦如是。心意及意識。分別外相義。八無差別相。非能見可見。如大海水波。無有差別相。諸識於心中。轉變不可得。心能造諸業。意是能分別。意識能知法。五識虛妄見」(大正藏一六、五七四中下)と見える。なお、「四卷楞伽」には、これに對應する部分は存在しない。

(6) 未詳であるが、恐らく「八識義章研習抄」にしばしば引用されている「相法師」の「攝大乘論疏」を指す。そして、これは「東域傳燈目錄」に「同(攝大乘論)古論疏七卷(附附云云)」(大正藏五五、一一五六下)と見えるものに他ならないであろう。辯相は淨影寺慧遠の弟子であるが、彼が「攝大乘論」に詳しかったことは、「續高僧傳」の傳記に「末南投徐部。更採攝論及以思覺。皆披盡精詣。傳名東境。光問師資。衆所歸向」(大正藏五〇、五二〇上)という記述が見られることによつて確認される。また、同じく靈潤伝にも「有辯相法師。學兼大小。聲聞于天。攝論初興。盛其麟角。在淨影寺。創演宗門。造疏五卷。即登敷述。京華聽衆。五百餘僧。豈義之者。敷登二百」(同上、五四五下)と見え、「攝論疏」を著わしたことも知られるから、「東域傳燈目錄」所載のものは、卷數は異なっているものの、この辯相の著述と見てよいと思われる。

(7) 「十卷楞伽」卷第七に「大慧。阿梨耶識者。名如來藏。而與無明七識共俱。如大海波。常不斷絕。身俱生故。離無常過。離於我過。自性清淨。餘七識者。心意意識等。念念不住是生滅法。七識由彼虛妄因生。不能如實分別諸法」(大正藏一六、五五六中下)と見える。

(8) 求那跋陀羅譯「勝鬘師子吼一乘大方便廣經」に「世尊。若無如來藏者。不得厭苦樂求涅槃。何以故。於此六識及心法智。此七法利那不住。不種衆苦。不得厭苦樂求涅槃。世尊。如來藏者。無前際不起不滅法。種諸苦。得厭苦樂求涅槃」(大正藏二二、二三二中)と見える。なお、この「勝鬘經」の文章については、B-3、B-4も参照せよ。

(9) 眞諦譯「大乘起信論」に「是故。三界虛偽。唯心所作。離心則無六塵境界。此義云何。以一切法皆從心起妄念而生。一切分別即分別自心。心不見心。無相可得。當知世間一切境界。皆依衆生無明妄心而得住持。是故。一切法如鏡中像無體可得。唯心虛妄。以心生則種種法生。心滅則種種法滅故」(大正藏三三、五七七中)と見える。

(10) 眞諦譯「攝大乘論釋」卷第一に「論曰。尋第二體。離阿梨耶識不可得。釋曰。第二識緣第一識起我執。若離第一識。此識不得起。故知有第一識。今成就第二識。爲顯第一識故。論曰。是故阿梨耶識成爲意。依此以爲種子。餘識得生。釋曰。離第一識。無別識體爲第二識因。及生起識因。佛說心名。此名目第二識。佛說識名。此名目六識。佛說意名。此名目第一識。何以故。第二識及生起識。若前已滅。後識欲生。必依第一識生。及能生自類故。說名意根」(大正藏三二、一五九上中)と見える。

(11) 「十卷楞伽」卷第二に「爾時。世尊而說偈言。譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥擊。無有斷絕時。梨耶識亦爾。境界風吹動。種種諸識浪。騰躍而轉生。背赤鹽珂乳。味及於石蜜。衆華與果實。如日月光明。非異非不異。海水起波浪。七識亦如是。心俱和合生。譬如海水動。種種波浪轉。梨耶識亦爾。種種諸識生。心意及意識。爲諸相放說。諸識無別相。非見所見相。譬如海水波。是則無差別。諸識心如是。異亦不可得。心能集諸業。意能觀集境。識能了所識。五識現分別」(大正藏二六、五三三中下)と見える。なお、これは、註2の「四卷楞伽」の文に對應する箇所の「十卷楞伽」の文である。

3. 「訓云。若使¹已下。引經爲問。阿跋四云。善不善者謂八識。何等爲八。謂如來藏名識藏。心意識及五識身。連磨釋云。心者法智心也。訓云。以勝鬘經心法智對顯³心意者皆七識也。已上。此文既說如來藏識別爲一種。故知。此文說離分門。經中既合眞識妄識名爲一種。獨事分六。若如前言。何故經中不說眞妄各有六識。爾唯經說三重識中各有六識。定非正說。良以已下。答文可知。」(卷中、大正藏七〇、六六七下)

(1) これは、淨影寺慧遠「大乘義章」卷第三末「八識義」の「又隨表別。亦得分識以爲十八。彼六識中。事識有六。事識之本。妄識有六。妄識所依。眞識有六。故有十八。若使妄眞齊有六者。何故經中但說八識。良以事識差別義。顯隨根分六。妄眞不顯。不隨根別。故但言八」(大正藏四四、五二一中)に對する解説である。

(2) 「四卷楞伽」卷第四に「大慧。善不善者謂八識。何等爲八。謂如來藏名識藏。心意意識及五識身。非外道所說」(大正藏一六、五二二中)と見える。この文章はB12に既出であり、更にB14でも達摩の註釋とともに引用されている。

(3) これは、B12の註8の「勝鬘經」の引用文を指すものであろう。

(4) この「楞伽經疏」の文章については、B14も参照せよ。

4. 「訓」云。聞說等者。問。維摩說無第七情。文如前引。說有七識者。即楞伽勝鬘說也。破有三別。一者舉經所說破。楞伽文如前數引。勝鬘經云。若無如來藏者。不得厭苦樂「求」涅槃。何以故。於此六識及心法智。此七法刹那不住。不種衆苦。不得厭苦樂求涅槃。義記下云。於此六識及心法智。此七不住。明其離眞妄體不立。若無眞此七一念不立。名利那不住。不種已下。明其離眞妄即無用已上。問。寶窟下卷引義記文已云。此造疏人不見攝論。謂第七識名法智。「攝」論第七「識」名阿陀那。此云無解識。況得稱法智耶。今所明者。六識。不異舊釋。「及」心法智者。六識已(前字)是心王也。智是心數法也。故言心法智。小乘人曰。由六識起煩惱種苦。由心法「智」能厭苦樂「求」涅槃。何須佛性已上。今依此文。章主所釋難可依信。嘉祥講經深契經旨。所以攝論明第八識。多對小乘。明六識中染淨之用皆依第八。經中所明。況非之耶。答。寶窟之文。其旨雖明。今釋亦會佛經義勢。故彼楞伽阿跋多羅第四卷云。大慧。我於此義。以神力建立。令勝鬘夫人及利智滿足諸菩薩等。宣暢演說如來藏及識藏名「與」七識俱生。又云。大慧。七識不流轉。不受苦樂。非涅槃因。大慧。如來藏者。受苦樂。與因俱若生若滅已上。首尾所明。是如來藏能持七識。即勝鬘顯其說同明。七法者即七識也。爾彼攝論

說第七識名阿陀那者。且約迷時我執以名。不遮悟時亦名法智。又第七識望彼真心。皆爲無解。爾於自分非全無智。故無有過。所以達磨楞伽疏第五云。心意者七識也。心者法智心也。考之。正是引勝鬘說楞伽耳。豈獨章主以第七識名法智耶。…（卷下、大正藏七〇、六八七上中）

(1) これは、淨影寺慧遠「大乘義章」卷第三末「八識義」の「二執定無。有人明說但有六識無第七情。便言一向無第七識。對治此執說有七識。如楞伽中說八識義。勝鬘亦云。七法不住。若無妄識。說何爲八。說何爲七。又六識外無妄識者。聲聞緣覺入涅槃時。事識都滅。即應是佛。無別明妄識心故。入涅槃時。雖滅事識。癡妄猶在。所有癡妄識。何得言無。經中所謂無七情者。事識之中。無第七情。非無妄識」（大正藏四四、五三八下）に對する解説である。

(2) 『維摩詰所說經』卷中に「爾時文殊師利問維摩詰言。菩薩云何觀於衆生。維摩詰言。譬如幻師見所幻人。菩薩觀衆生爲若此。如智者見水中月。如鏡中見其面像。如熱時焰。如呼聲響。如空中雲。如水聚沫。如水上泡。如芭蕉莖。如電久住。如第五天。如第六陰。如第七情。如十三人。如十九界。菩薩觀衆生爲若此。如無色界色。如焦穀牙。如須陀洹身見。如阿那含入胎。如阿羅漢三毒。如得忍菩薩貪恚毀禁。如佛煩惱習。如盲者見色。如入滅盡定出入息。如空中鳥跡。如石女兒。如化人起煩惱。如夢所見已瘡。如滅度者受身。如無烟之火。菩薩觀衆生爲若此」（大正藏一四、五四七上中）と見える。

(3) これは、「四卷楞伽」卷第四の文、「大慧。善不善者謂八識。何等爲八。謂如來藏名識藏。心意意識及五識身。非外道所說」（大正藏一六、五二二中）を指す。ここに「如前數引」と言われているように、既に、B-2、B-3で引用されている。

(4) 求那跋陀羅譯「勝鬘師子吼一乘大方廣經」に「世尊。若無如來藏者。不得厭苦樂求涅槃。何以故。於此六識及心法智。此七法剎那不住。不種衆苦。不得厭苦樂求涅槃。世尊。如來藏者。無前際不起不滅法。種諸苦。得厭苦樂求涅槃」（大正藏一一、二二二中）と見える。なお、この文章は既にB-2に引用されている。また、B-3も参照。

(5) 淨影寺慧遠の「勝鬘經義記」は、これまで下巻を缺いていたが、近時、敦煌本（ペリオ二〇九一號）が発見されたため、この原文を確認することができるようになった。それによれば、「於此六識及心法智。舉其妄心。六是事識。及心法智是

第七識。迷時名心。解名法智。此七不住。明其離眞妄體不立。事六妄一。合爲七法。無眞此七一念不立。名利那不住。不種已下。明其離眞妄則無用」となっており、「八識義章研習抄」の引用が取意であることが知られるとともに、意味の上では問題は無いものの、「若無」の「若」が「若」が「即」の誤りである可能性も考えられる。なお、從來から傳承されてきた上巻は、末尾に「正治二年（一一〇〇）六月二十日。於東大寺本房。以珍海已謄本書寫了。同七月二日。以同本一校了」（續藏一三〇—二九三d）と記されているように、「八識義章研習抄」の著者である珍海自身の手澤本を祖本とするものであり、また、奈良時代にこの完本が存したことは、石田茂作氏の「奈良朝現在一切經疏目錄」によって確認できる（No.一九〇二）。

(6) 吉藏『勝鬘寶窟』卷下末に「於此六識及心法智者。有人言。六識者。六是事識。及心法智是第七識。迷時名心。解名法智。第八名藏識。是阿利耶。此道疏人不見攝論。謂第七識名法智。攝論第八識名阿陀那。此云無解識。豈得稱法智耶。今所明者。六識不異舊。及心法智」者。六識既是心王。智是心數法。故言心法智。小乘人云。由六識起煩惱能種苦。由心法智。能厭苦樂求涅槃。何須佛性」（大正藏三七、八三中）下。「」内は大正藏の對校本による補足と見える。

(7) 眞諦譯「攝大乘論釋」卷第一に「論曰。復次諸衆生藏此識中。由取我相故。是故名阿梨耶識。釋曰。藏者以執我。約阿陀那識及意識。說衆生名。何以故。一切衆生無無我執。我執若起緣何境。緣本識起。微細一類相續不斷故」（大正藏三一、一五七中）、「論曰。云何於聲聞乘不說此心相。及說阿梨耶阿陀那名。微細境界所攝故。釋曰。問各問名體。答通各兩問。此識於所知中最微細。以非二乘所緣故。此識亦是境界。若求佛果人。必須通達此識。此識是應知等九義所依藏故。故名所攝。復次菩薩有微細境界藏。此識難解故。屬微細境界所攝。論曰。何以故。聲聞人無有勝位。爲得一切智智。釋曰。何故於聲聞乘不說微細境界。聲聞人不作正勤求知如來境界。修行唯爲自利故。諸聲聞人感障。由苦等智。龜淺墮行。可得除滅。論曰。是故。於聲聞人。離此說由成就智。令本願圓滿。故不爲說。釋曰。諸佛見聲聞人少欲知足。求除自惑障。此障若離此智。由餘智可得滅除。本願得成。不爲解脫他障。不發願求如來法身。修行微細甚深道。故不爲說」（同上、一五九中）下）など見える。

(8) 『四卷楞伽』卷第四に「大慧。此如來藏識藏。一切聲聞緣覺心想所見。雖自性淨。客塵所覆故。猶見不淨。非諸如來。大

慧。如來者眼前境界。猶如掌中視阿摩勒果。大慧。我於此義。以神力建立。令勝鬘夫人及利智滿足諸菩薩等。宣揚演說如來藏及識藏名與七識俱生。聲聞計著。見人法無我。故勝鬘夫人承佛威神。說如來境界。非聲聞緣覺及外道境界。如來藏識藏。唯佛及餘利智依義。菩薩智慧境界。是故。汝及餘菩薩摩訶薩。於如來藏識藏。當勤修學。莫但聞覺作知足想」(大正藏一六、五一〇中下)と見える。

(9) 「四卷楞伽」卷第四に「大慧。七識不流轉。不受苦樂。非涅槃因。大慧。如來藏者。受苦樂。與因俱若生若滅。四住地無明住地所醉。凡愚不覺。剎那見妄想熏心」(大正藏一六、五一二中)と見える。

(10) 眞諦譯「攝大乘論釋」に「二受者識。意界名受者。識即三種意識。一謂阿梨耶識。是細品意識。恆受果報。不通善惡。但是無覆無記。二陀那識。是中品意識。但受凡夫身果報。三者謂常所明意識。是麁品意識。通受善惡無記三性果。五識亦爾。此三品意識。通能受用果報。但今據興廢爲言故。呼梨耶識爲受者識」(大正藏三一、八七九中)などと見える。

(11) この「楞伽經疏」の文章は、多少の文字の相違は見られるもの、B-3と同所の引用と考えられる。

C. 湛譽(二七一—二三四六?) 『起信論義記教理抄』卷第十五(元亨二年(一三三三)〜興國元年(一三三〇)撰)

1. 「疏。經中說爲相生滅也」⁽¹⁾ 問。楞伽所說二種生滅者。爲但限心法緣慮。爲當通根境歟。兩方。若云限心

法者。今此約所相之法麁細。顯二種生住異滅。縱雖根境。何無麁細乎。是以達磨禪師楞伽疏第一云。無始以來。識流注相續不斷。名流注生住滅。生死諸根滅。各相生住滅⁽²⁾已上。此釋者。流注生滅約心法。相生滅約諸根。分別二種生滅見。若依之爾者。今疏意。但約心法釋之。況十卷楞伽中。識有二種滅等云云⁽³⁾。豈通根境乎如何。答云云。(大日本佛教全書九四、二九七下)

(1) 法藏「大乘起信論義記」卷下本に「復次分別生滅相者。有二種。云何爲二。一者麁與心相應故。二者細與心不相應故。

前中言鹿與心相應者。六染中前三染是心相應。其相應鹿。經中說爲相生滅也。細與心不相應者。後三染是心不相應。以無心心法鹿顯之相。其體微細恆流不絕。經中說爲流注生滅。此依四卷楞伽。十卷中云。識有二種滅。一者相滅。二相續滅。生住亦如是。經中出名。不別顯相。故今論主約相應不相應義。顯其二種鹿細之心生滅之相。釋中有。初約人對顯。後辨相所依。初中對三位人也。(大正藏四四、二六八下、九上)と見える。

(2) 「四卷楞伽」卷第一に「爾時。大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。諸識有幾種生住滅。佛告大慧。諸識有二種生住滅。非思量所知。諸識有二種生。謂流注生及相生。有二種住。謂流注住及相住。有一種滅。謂流注滅及相滅。諸識有三種相。謂轉相業相真相。大慧。略說有三種識。廣說有八相。何等爲三。謂真識現識及分別事識。大慧。譬如明鏡持諸色像。現識處現亦復如是。大慧。現識及分別事識。此二壞不壞。相展轉因。大慧。不可思議薰。及不思議變。是現識因。大慧。取種種塵。及無始妄想薰。是分別事識因。大慧。若覆彼真識。種種不實諸虛妄滅。則一切根識滅。大慧。是名相滅。大慧。相續滅者。相續所因滅。則相續滅。所從滅及所緣滅。則相續滅。大慧。所以者何。是其所依故。依者謂無始妄想薰。緣者謂自心見等識境妄想。大慧。譬如泥團微塵。非異非不異。金莊嚴具亦復如是。大慧。若泥團微塵異者。非彼所成而實彼成。是故不異。若不異者。則泥團微塵。應無分別。如是大慧。轉識藏識真相若異者。藏識非因。若不異者。轉識滅。藏識亦應滅。而自真相實不滅。是故大慧。非自真相識滅。但業相滅。若自真相識者。藏識則滅。大慧。藏識滅者。不異外道斷見論議。大慧。彼諸外道作如是論。謂攝受境界滅。識流注亦滅。若識流注滅者。無始流注應斷。大慧。外道說流注生因。非眼識色明集會而生。更有異因。大慧。彼因者。說言若勝妙若士夫若自在若時若微塵」(大正藏一六、四八三上)と見える。

(3) 「各相生住滅」の「各」は、恐らく「名」の誤り。

(4) 「十卷楞伽」卷第二に「爾時。聖者大慧菩薩復白佛言。世尊。諸識有幾種生住滅。佛告聖者大慧菩薩言。大慧。諸識生住滅。非思量者之所能知。大慧。諸識各有二種生住滅。大慧。諸識一種滅者。一者相滅。二者相續滅。大慧。諸識又二種住。一者相住。二者相續住。大慧。諸識有二種生。一者相生。二者相續生。大慧。識有三種。何等三種。一者轉相識。二者業相識。三者智相識。大慧。有八種識。略說有二種。何等爲二。一者了別識。二者分別事識。大慧。如明鏡中見諸色像。大慧。了別識亦如是。見種種鏡像。大慧。了別識分別事識。彼二種識無差別。相迭共爲因。大慧。了別識不可思議薰變因。

大慧。分別事識分別取境界。因無始來戲論熏習。大慧。阿梨耶識虛妄分別種種熏滅。諸根亦滅。大慧。是名相滅。大慧。相續滅者。相續因滅。則相續滅。因滅緣滅。則相續滅。大慧。所謂依法依緣。言依法者。謂無始戲論妄想熏習。言依緣者。謂自心識見境界分別。大慧。譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復如是。非異非不異。大慧。若泥團異者。非彼所成。而實彼成。是故不異。若不異者。泥團微塵應無差別。大慧。如是轉識阿梨耶識。若異相者。不從阿梨耶識生。若不異者。轉識滅。阿梨耶識亦應滅。而自相阿梨耶識不滅。是故大慧。諸識自相滅。自相滅者。業相滅。若自相滅者。阿梨耶識應滅。大慧。若阿梨耶識滅者。此不異外道斷見戲論。大慧。彼諸外道作如是說。所謂離諸境界。相續識滅。相續識滅已。即滅諸識。大慧。若相續識滅者。無始世來諸識應滅。大慧。諸外道說。相續諸識從作者生。不說識依眼色空明和合而生。而說有作者。大慧。何者是外道作者。勝人自在時微塵等是能作者」(卷第二、大正藏一六、五二一下)と見える。これは、先の「四卷楞伽」の文章に對應する箇所である。